

**授業概要**

16世紀半ばから17世紀初頭にかけてイングランドで活躍した劇作家ウィリアム・シェイクスピアの『ハムレット』を翻訳と原典を用いて読むことにする。世界文学史上最高の作品のひとつと位置付けられており、人間存在の深奥に迫る必読の作品である。シェイクスピアの演劇的技法や修辞法について基本を把握した上で、台詞を正しく解釈し、受講者それぞれが「自分は何者か」を考察する一助となるように指導する。

**授業計画**

第1回	オリエンテーション エリザベス朝演劇とシェイクスピアについて
第2回	第一場（1） 演劇的技法と亡霊の存在について
第3回	第一場（2） 第一独白を読む
第4回	第一場（3） 亡霊との邂逅
第5回	第二場（1） ポローニアスとローゼンクランツとギルデンスターンは死ぬ
第6回	第二場（2） 第二独白を読む
第7回	第三場（1） 第三独白を読む
第8回	第三幕（2） オフィーリアは尼寺へ行くかオフィーリアは尼寺へ行くか
第9回	第三幕（3） 劇中劇とクローディアス
第10回	第三幕（4） 王妃の居間で
第11回	第四幕（1） 国王を喰らう蛆虫
第12回	第四幕（2） オフィーリアの狂気とレアティーズの帰国
第13回	第五幕（1） 最後の審判まで保つ家
第14回	第五幕（2） あとは沈黙
第15回	まとめ
第16回	筆記試験

**到達目標**

「文学作品を読む」という行為を自ら行えるように、読みの訓練を行う。歴史的背景や文化的背景を知ること、「ことば」をコンテクストに即して読むことの重要性を学ぶ。さらにイメージリーや修辞法についての基本的な知識を身につける。

**履修上の注意**

講義科目ではあるが、文学作品の読み方を身につけ、自分で読むという意味では、実習科目である。座って板書を書き写していればよいというものではない。履修するものは速やかに翻訳を購入し、第2回目の授業時までには読み終わっておくこと。遅刻は受講態度においてマイナスとなる。

**予習復習**

あらかじめ自分で読み、授業で学んだことを活かして再読し、次の場面を読み続ける。これが予習と復習である。また必ず授業前に音読してくること。その際に読めない漢字、意味のわからない言葉の意味は調べておくこと。これを行っていないと判断した時には、出席扱いとはしない。

**評価方法**

予習復習の程度、授業への参加度、随時課すレポートを受講態度として点数化し、筆記による定期試験の結果と合わせて評価する

学期末試験 70% 受講態度 30%

**テキスト**

翻訳『ハムレット』

出版社、翻訳者は問わない（ちくま文庫、角川文庫、岩波文庫が入手しやすい）。各自で購入すること。書店にない場合、発注すると時間がかかるので、他の書店をめぐること。複数の翻訳を購入して読み比べることを強く勧める。原典の必要箇所は配布する。